増田家回顧録

増田朋美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
増田家回顧録

【Ｎコード】
Ｎ０２３２Ａ

【作者名】
増田朋美

【あらすじ】
語り物。蕎麦屋を営む一家の話。詳しくは本文をご覧ください。

解説と人物紹介

形式／語り物、回想録
分類／洒落、滑稽、人情
画像は無し。ご想像に任せます。

登場人物
増田文治
全編の語り手。本文では１１歳。小学校五学年。
増田良治
増田家の当主。４５歳。直治の実兄で文治の伯父。厳格で懐古主義者。三味線を弾く。
増田直治（父ちゃん）
文治の父で良治の弟。４０歳。父兄とうまく行かず、早くから家を飛び出し、塗り物職人となる。酒好きで遊び好き。
増田英治（じいさん）
良治、直治の父。７０歳。既に主導権を良治に譲ってのんびりと暮らしている。
正太
増田家に住み込みで働く青年。
平助（ぺーちゃん）
増田家に住み込みで働く、かなりの切れ者。
朝子
同じく増田家に住み込みで働く女中。
八重
増田家に住み込みで４０年以上働いてきた女性。
鈴木善郎
増田家の隣人。製紙会社に勤める。
鈴木達蔵

善郎の息子。笛がうまい。音楽家を志し、父親と喧嘩ばかりしている。

鈴木和菜

善郎の娘で達蔵の弟。

実藤玲

文治の同級生で、事故により跛となる。プライドが高く、他人を寄せ付けない。

箏を弾く。

ドンガバチョ

文治の担任教師につけられたあだ名。

第一話

これは何の変哲も無い平凡な人生の回顧録であるから、劇的な展開は期待しないでもらいたい。

私は増田文治というが、私が幼少の頃の時代、私はとても変わったところに住んでいた。私がまだ赤ん坊の頃、父は生活の糧が底を尽いて増田家にやってきたらしい。私が物心ついたときは既に増田家の中にいて、そこで生活していたから、私の故郷はそこということになる。

増田家では伯父と祖父、それに住み込みで働く従業員たちがいたが、その人たちも今風に言ったら大変変っていたということになるかもしれない。そのことを書くことにする。

その一

私の父ちゃんは塗り物を作っていた。塗り物なんて物は生きるためには必要とされない。当たり前のことである。現代社会、機械製品で十分間に合う。父ちゃんがなぜ塗り物に走ったのかというと、増田家は代々蕎麦屋だったが、父ちゃんは蕎麦屋なんてけちくさいと嫌っていたからであった。日ごろから良治伯父さんと仲が悪く、よく喧嘩した。塗り物は大きな夢があると思っていた。それで、家を飛び出して修行に出たのであるが、あいにく現代社会で塗り物をほしがる人など、そう大していない。だからお金が無かった。生活の糧が全部無くなって奥さん、一つまり私の母であるが、私はその人を見たことがない。一に捨てられ、挙句の果てに増田家に戻ってきたのである。

父ちゃんは増田家に来てからも、塗り物を作りつづけていた。良治伯父さんは蕎麦屋を継いで、当主になっていた。当主、とは家の最終決定権を持つ人である。だから伯父さんのほうが優勢だった。伯父さんはよく、

「直治、おまえも一度塗り物やって、塗り物一個でやっていくことは、いかに大変か判っただろ、それなら店を手伝っておくれよ。」という。父ちゃんはうるせいなあといいながら酒をのむ。時には「うるせえなこの野郎！」と立ち上がる時もある。でも、三度の食事を出しているのは私だよと伯父さんに言われると、絶対後が出ない。伯父さんには頭が上がらないのだ。

でも、誰かが塗り物を買ってくれることがあれば「よう、兄貴、いつも馬鹿にされてるが、今日は塗り物が売れたゾウ！」と自慢する。伯父さんも伯父さんで「でも、それっておまえが哀れっぽいから、情けで買ってくれたんだろうさ！」という。こうなると、父ちゃんは何にも言えない。

それくらい気が小さい父ちゃんだった。

一方、伯父さんはものすごく厳しかった。私を名門の私立小学校へ通わせた。なぜかというと、「直治みたいな悪いやつにならないようにね。」ということだった。はじめは雷のようにおっかない人だと思っていたが、そのうち父ちゃんと似たようなところがあると判った。伯父さんは三味線ををよく弾いた。ばん、ばん、ばん！と、豪快な響きだった。自分が三味線を弾いていることを消して否定しなかった。休みの日はよく稽古場に行って、仲間もたくさんいるようだ。三味線だって客観的に言うと生きていくためには必要とされない。父ちゃんも塗り物にはまっている。だから二人ともそう言う抽象的な、芸術的なものに関心があるのだ。ただ、内側に持つか、外に持つかの違いなだけだったのである。

増田家は典型的な町屋作りで、家が極端に狭かった。今時、他の部屋を通って移動するなんて考えられない。しかも、二階が無いから、私と伯父さんと従業員の正太が居間で寝て、隣の六畳にじいさんと従業員の平助が、玄関を入ってすぐの四畳半に女性の従業員、朝子、八重さんが、父ちゃんは物置部屋三畳で寝ていた。昼間は居

間として食事したり、新聞読んだりして、夜はちゃぶ台を畳んで布団を敷いてねたのである。何よりも、増田家には机をおくスペースが無かったので、良治伯父さんが、「これで勉強しな」といって、りんご箱を一つもらってきてくれたが、きちんと作られておらず、がたがたゆれた。その間伯父さんたちがおしゃべりしたり、三味線を弾いたりするので、煩くってたまらない。私は何度か、「伯父さん、少しお声を小さくしていただけませんでしょうか？」と頼んだことがある。が、「何を言う。生意気なこと言うんじゃない。勉強するから静かにしてくれなんて、おまえにそんな特権は無いんだよ。自分のことに他人まで巻き込むんじゃない。」と厳しく叱られた。こう言うところが、普通の親と違う厳しさだった。

そんな風に、一方が一生懸命勉強している間、もう一方は愉快におしゃべり、また一方は三味線、そして父ちゃんが酔っ払って帰ってくる。嫌になるほど、どうしようもない家庭だった。

第二話

直治が芽の出ない彫刻家を誉める話。

増田家の隣に、鈴木家があった。当主鈴木善郎は製紙会社に勤めていて、その仕事が最も安全だといいふらしていた。鈴木家には子供が二人いて、上は達蔵、下は和菜といった。母親は二人が幼いときに亡くなっていた。

善郎さんは、母親の恥にならないように、一生懸命育てると誓ったのであるが、一つ間違いがあった。それは、二人が世間の笑い者にならないように、私立小学校へ通わせたのであるが、私立学校というのは、上流階級と下流階級を分離する、扉のようなものである。上流階級のものは、音楽や美術といった実生活に役立たないものに飛びつくことができる。達蔵はすぐにその階級の子供と親しくなり、その子達が習っていた笛に異常な関心を抱き始め、すがり付いて、貪り食い、朝から晩まで鳴らすようになった。中学校、高校となって、それはますますひどくなり、ついに音楽大学へ進ませてくれと、善郎に頭を下げるくらいにまでなったのである。これを聞いて、善郎は叩いて怒ったが、態度はまるで改まらず、二年生の二学期には、善郎の貯金を勝手に引き出して笛を買い、新聞社へ働きに行って、（新聞社で働くと、入学金を　出してくれるという制度を知っていたので、）文句一つ言わずに配達の仕事を続け、高校卒業と同時に音楽大学へ行ってしまったのである。良治伯父さんはすごいやつがいるものだと感心していたが、善郎さんには大きな裏切りと見えたようだ。それから五年も経つが、連絡一つ帰ってこないので、達蔵は人生を失敗したのだと、善郎さんは言いふらしていた。そして娘の和菜には、兄のような失敗をしないように、芸術の不要さを言いつづけてきたつもりだった。

その和菜が１７歳になった。あるとき、彼女が増田家にやってき

た。伯父さんに用があるというので、伯父さんは作業を止めて彼女を茶の間に通した。
「どうしたの和菜、何の用？」
「実はですね、」と、和菜は言った。「学校の美術部代表としまして、来月行われる、学校美術展に彫刻を一つ出そうと思うのです。それで、伯父様を木像にしたいんですけど，，，。よろしいですか？」
「なら他を当たりなよ。こんな白髪混じりの、４５のおじさんを像にしたって仕様が無い。もっと顔の良い人はいっぱいいるよ。」
「いいえ、伯父様だからこそ，像にするんですよ。伯父様は増田家の当主として何十年もお仕事なさってますでしょう，そう言うところを像にしたいんです。今日一日何も気にかけずにお仕事なさってください。スケッチさせてくだされば それでいいです。」
「そう。じゃ、好きにすれば。」
「じゃあよかった！」と和菜の顔がぱっと輝いた。
彼女はスケッチブックと鉛筆をもって厨房に入り、蕎麦を茹でたり，従業員たちに次々と指示を出していく伯父さんを絵に描いていった。一時間ばかりそこにいて、和菜は伯父さんたちに丁寧に礼を言って家に帰った。
「彫刻のモデルなんか頼まれて，旦那も結構良い顔してますね。」と、従業員の朝子がからかった。
「どこか勘違いしたんだよ、あの子は。」
「これを期に、旦那も容姿に気を配ってみたらどうですか，」と、正太が言った。「いつも同じ黒の着物でしょ，絵になりませんよ。」
「和菜ちゃんは、どうして彫刻なんかするようになったんですかね。」と、平助が言った。「たっちゃんも、和菜ちゃんも、善郎さんが禁止していたことを平気でする。」
「いいんじゃない、あの年頃の子は、そういうものにはまりたくなるんだよ。」と、伯父さんが言った。「くれぐれも他言しないようにね。」

「はい。」と全員が言った。
　さて、暫くたって和菜が彫刻をもってやってきた。それは、人の形をした、でも所々突起した、変なものだった。
「ほう、ムーアの作品みたいだな。」と、伯父さんが言った。
「そうですか、やはり尊敬していると、その人の作品に似てしまうものなのでしょうか。」と、和菜はちょっと照れ笑いを浮かべた。
「大体ね、そんなもんだよ。それを克服して自分の作品になるんだろ。」
「まだ初めなんだし、」と、平助も言った。
「でも、上手だなあ、君たちは二人とも感性いいや、たっちゃんも和菜ちゃんも。羨ましいな。」と正太も何とか誉め言葉を作って言った。
「良い思い出になるね。」
ところが、どう言う風の吹き回しか、父ちゃんが善郎さんを家に連れてきてしまった。娘がムーアの話なんかしているものだから、善郎さんはすごく怒って、「こらっ！」と居間に飛び込んだ。
「こんな変なものを作りおって！」と、像を叩き壊そうとした。すると、「ちとまった、」と父ちゃんが止めた。
「ほう、こりゃどうやって作るんだ？随分精巧に作ってあるじゃないか、こんな細かい作業、誰がやったんだ？」
「和菜ちゃんだよ！お前、壊すなよ！」と伯父さんが言った。
「和菜ちゃんか！和菜ちゃんはほんの子供だったじゃないか、それがこんなものを作るようになったのか！偉いぞ！」
と、父ちゃんは大いに誉めてやった。ところが善郎さんは、こう、がなりたてた。
「直治。お世辞はいいよ。二人とも馬鹿なことに走りおって、やい、和菜、散々言っただろ、芸術ってのは社会の脱落者が逃げるところなんだぞ！仕事にありつける筈はない！無職になっちまうんだ！無職ってのはな、一番犯罪に走りやすくなるんだよ！和菜、お前は刑務所に入りたいのか！いやならすぐによせ！達蔵は何一つ連絡よこ

してこないじゃないか！今ごろ借金に追われて逃げてらあ。」
「お兄ちゃんが連絡よこさないのは、父ちゃんが悪いんじゃないかしら！」と和菜が怒鳴り返した。「父ちゃんは、いつもいろんなことに一生懸命やれって言うくせに、私が何かしようとすれば、すぐ、それは駄目だ、もっと役に立つことをしろって言うじゃない！結局何をやっても駄目駄目駄目って全部駄目にするだけなのよ！だからお兄ちゃんだってやむを得ず連絡をよこしてこないのよ！」
「現に駄目だからそう言っているんだ。」
「じゃあ役に立つことって何よ！どう区別すれば良いのよ！どうすればいいのよ！」
喧嘩が段段エスカレートしてきたので、良治伯父さんは
「ほら、二人とも喧嘩はやめて、善郎さん、怒るのやめて飲みに行こう。」と善郎さんを引っ張って外へ連れ出した。玄関の外で伯父さんが、「あの年頃の子はね、力が有り余っているだけだよ。だからやらせておけばいいの。そのうち、自分にはできないってあきらめるから、それまでの辛抱。」と言っているのが聞こえた。
和菜は床に伏して泣いていた。それをみて父ちゃんが、
「和菜ちゃん、泣いちゃいかん、泣いたら負けだよ。これからも良い彫像を作ってくれな。君は偉いぞ。みんなが知らないことに気づいて、それを形にできるんだから。さ、家へ帰れや。」
と、はげますと、「ありがとうございました。」といって、像を良治伯父様に渡してくれと言って、家に帰った。
　私はこの喧嘩を部屋の隅で見ているだけであった。確かに芸術と言うのは役に立たない、つまり銭にはならない。でも、何か表現したいと言う人は多い。私が彼女位の年齢になったとき、世の中はどうなっているだろうか、真剣に考えたものだ。

第三話

同級生に赤い靴を差し上げる話

どこの世界にも一人か二人、変なやつがいるものである。一つか二つだけでなく、定義を一から十までひっくり返してしまうやつ。こういう人に対し、二つの解釈が考えられる。一つ、そのものに対し嫉みとやっかみを抱いて、評価を下げようとする。二つ、その者を偉いと思い、,,,どうする?そのことを書くことにする。

その変なやつは私と同級生で、名を実藤玲と言った。端正な顔つきで,鼻は高く、凛としていた。私など,目が目蓋で陥没していて,比べ物にならなかった。成績もよく、礼儀正しかったが,致命的な弱点があった。一やつは跛であった。

原因はよく知らないが,やつがまだ歩き始めて間もない頃,近所の神社へ出かけた際,誤って石段から転落し,踵骨腱が切れてしまったと言うものが定説だった。それでやつの左足は胴からぶら下がっているだけになってしまったと、我が担任、ドン=ガバチョ先生は仰った。でも、それだけが原因ではないような気がする。もっと他に何かあると思うのだが,それは解けなかった。悪い足はいつもつま先だけが地面についているだけで,ずるずるとけたたましい音を立てて、亀よりものろいスピードで歩く。ときにこんがらがってよくこける。

ので、やつの成績は、体育ではいつも一だったが、勉強に関しては抜群だった。それが他の同級生たちの憎むところだった。男も女もやつに嫌がらせをした。やつは不幸な子供だなと私は思っていた。

しかし、私の勝手な定義は間違いであった。あるとき、学校で和楽器が導入され、箏の授業を受けることになった。みな嫌そうな顔をしていた。それで、一人づつ箏をあてがわれて,さくらさくらを弾くことになったが,みなやる気がないのだから,ほとんど練習し

なかった。すると、後ろの席に一人でポツリと座っていた跛が、右手に爪をはめて，さくらさくらを弾き始めた。やつが弾いているのではなくて，楽器が鳴らしてもらっているように見えた。弾いている姿をみると、いつもののろまな跛男ではなくて、まったく違う人物のように見えた。誰もやつの演奏を聞くものはいなかった。私だけがそれをじっと見ていた。

「きっと足の欠陥の償いとして，自然が，やつの指に恐るべき力を与えたんだな。」と私は一人で言った。

授業が終了してしまうと，やつは元通りの跛に戻った。弾いているときには、美しく，威厳があるように見えるのに，立って歩くと，みずぼらしい、卑小な男になってしまうのである。そしてまた同級生たちにからかわれ，物を取られたり，誰からも無視されたりするのである。でも、やつは酷いことをされても、泣こうとも、抗議しようともしない。いつも朝一番に学校に来て、下校時間に帰る。補助具の類は付けず，例え雨でも足を引きずってやってくるのだった。

あるとき、私はやつに「あれだけ酷いことされて、学校来るの嫌にならないの？」と聞いたことがあった。するとやつは「しかたないことだから！」と、ぽしっと言い返した。やつの丸い二つの目が私をきっと睨み付けた。ものすごいプライドの高さだった。と、いうより、人を受け付けなくなってしまっていたのだろうか？私は、多分そうだと思った。やつの靴をみて、左足のつま先部分が磨り減ってしまっているのに気付いて，私は（当時は１１歳の無知で無分別な子供であったから，この程度しか思いつかなかったのだろう。それにしても、なんと言う稚拙なことをしたのかと今ではあきれ返っている。）、靴屋へ行って、踊りのとき、女の子が履く、先端に鉄が入った赤い靴を買って、やつの下駄箱に入れてやった。これなら、先っぽが磨り減ってしまう心配もないと思ったのだろうか。

次の日，やつが私のところへやってきて，「なぜ昨日あんなものを入れた？」と言った。私は「ほら、君いつもつま先付いて歩いて

るじゃない，それで靴の先が磨り減ってるから、歩きにくいと思って。あの靴は、つま先に鉄が入っているんだよ。」と言った。やつはぎょろりと目を動かして，「カーレンの赤い靴じゃあるまいし、縁起が悪い。」と言った。「それしか売ってなかったんだ、ごめん。」と私は言った。

やつの唇が震えていた。目の力が弱まってきた。歯ががちがち鳴った。

「私を、馬鹿にするために入れた？」と言った。「ちがうよ！」と私は言った。とにかく善意であることを判ってほしかったが，やつには通じないようだった。どうしようもないことだった。一度身についてしまった定義と反対のことを理解してもらうには，時間がかかる。

やつは、学校に筝が置かれてから，休み時間や放課後に弾くようになった。きっとそれでやっと自分の居場所が見つかるのだろう。それと、教室から出たいという一途な願いがあったにちがいない。私はやつが弾いている間に、こっそり音楽室に入って、やつの演奏を聞いていた。これを何十回も繰り返した。そうしているうちに，やつも痺れを切らして、「どうしていつも、こんな馬鹿げた音をきいているのだ、あんたにはただの訳の判らないものとしか、考えられないだろう？」と言った。「いや、純粋に君の音が良い音だと思ったからだよ。」と私は言った。「訳のわからないものなんかじゃない、僕の伯父さんが三味線をよく弾くから，そういう音楽を多少知っているんだ。」

「本当に？」とやつが言った。まだ迷っている風だった。

「本当。」と私は言った。やつは暫し黙って、「なら、こう言うべきなのかな。」と呟いた。そして、「この間，赤い靴ありがとう。生意気なことを申し上げて本当にごめんなさい。」と、言った。

私と玲が友達になったのはそういう経緯があったからである

第四話

直治が奮発して，増田家を大山へ連れて行く話。

増田家にも夏休みがやってきた。7月31日のこと、父ちゃんがいつまでたっても帰ってこないので，きっと飲み屋で寝てしまったのだろうと，私達は思っていた。

夜11時を回って，いきなりがらりと玄関の戸が開いて，「帰ったゾウ！」と、がなりたてて父ちゃんが帰ってきた。廊下を歩く足音がいつもと違っていた。伯父さんがすぐそれに気付いて，

「直治のやつ，どうも歩くテンポがおかしいぞ。これはまさか、酒を飲めないほど，悪いことをしたということか？」と、首をかしげた。

「おう、かえったぞ！」と、父ちゃんは居間の襖をがらりと開けた。

「なんだよお前，今日は酒飲んでないじゃないか，」と、伯父さんが言った。

「おう、みんなよく聞けよ，良い知らせをもってきたぞ！」

「ああ、お前の，良い知らせなんて，そんな対した事じゃないだろ，聞くだけ無駄だよ。」

「何ですか，直治さん」と、平助が言った。

「おう、良い知らせよ。だから、酒なんて飲めなかったのよ。」

「さっさと言っちまいなよ。」

「兄貴，いよいよ夏休みが到来だなあ！」

「そうだねえ、夏休みは一番の稼ぎ時だねえ、観光客がたくさん来るんだから。」

「がく、、、。兄貴，またそんな事言いやがる。せっかく夏休みが来たんだからよ，明日くらい一日休んで、皆で出かけよう！」

「「何馬鹿なこと言ってるんだよ！そんなね、お前みたいに遊びほうけてるやつとは全然話が違うの！そんなことしてる余裕なんかな

いんだよ！」
「兄貴，大山だよ、大山。皆で大山に一泊しよう。８人分予約とって来た。」
「嘘だろ！」と、全員岩石ハンマーでぶたれたように黙ってしまった。
「お前が，予約なんてできたのか？」と、辛うじて伯父さんが言った。
「大山ねえ，」と正太が言った。「昔から雨降り山と言うからねえ，年か〝ら年中雨が降っているところだろ，嫌な予感がするなあ。」
「その、大山へ行く経路はちゃんと知ってるんだろうね。」
「おう、調べたとも，まず、東名高速道路で厚木まで行って，伊勢原へ行く。そして大山駐車場に車を止め，大山ケーブルカー乗り場行きのバスを捕まえる。バスは一時間に三本ある。のったら、大山ケーブルカー下社駅で降りる。そこから登山道を登る。頂上には大山阿附利神社奥の院があって，そこで家内安全商売繁盛を願うことができる。これでどうよ。」
「もういっぱつぶたれたよ。」と正太が行った。
「よく調べたなあ，」と、伯父さんが言った。「いつもそう言う風にてきぱきとしてくれると良いんだけどな。」
「まだあるぞ、ケーブルカーの運賃は往復８４０円。安いだろ，それからバスは，」
「ああいいよ、そんなものは各自で出すから。で、とまるとしたら，どこに泊まるんだい？」
「大山には温泉があるから，ケーブルカー駅の側にある，旅館ＯＸに泊まることになる。今日ＯＯ旅行会社に頼んできた。だから酒を飲む余裕もなかったのよ。」
「おいおい、こりゃ、ひょっとすると本物だぞ。」と、じいちゃんが言った。「直治の言う通りにした方が良いかもな。」
「そうさ、兄ちゃんも父ちゃんも、平助正太朝子手伝い部隊もよくやった。ここで皆誉めあっていいんじゃないか。な、大山。皆で行

こう。」
「何も起こらなきゃいいけど。」と、八重さんが心配そうに言った。
「あたしは神社に行ったらこう絵馬に書いてくるわ。『三K男に逢えますように』って！」と、朝子はもう行く気でいた。
と、いうわけで、次の日から二日間、店は臨時休業にして、皆で大山に行くことになった。

さて、次の日、起きてみると，雨だった。「雨だから無理だね。」と、八重さんが言っていたが，父ちゃんは一人はりきって、「さあ行くぞ！」と、わめいていた。「こんな雨だからやめようよ。」と、私は言ったが、「うるせえ！一度決めたことはやり通す！」と言って怒り出すので，私達はすごすご出かけていった。東名から、伊勢原辺りまではよかったが，大山に入ると，視界が濃い霧で覆われ，ほとんど見えなくなってしまった。
「ほらみろ、やっぱり雨降り山だ。いつもこんな感じなんだよ。これじゃ駄目だよ。弾き返しましょうや。」と、正太が言ったのだが、父ちゃんはどんどん進んで行ってしまうので，仕方なく後を付いて行った。
坂を上ると，両側に店がずらりと並んでいた。店員達が威勢良く宣伝をしていたが，私達は父ちゃんを追いかけるのに一生懸命で，ろくに聞こえなかった。
父ちゃん一人ピンピンしていて、私達はへとへとに疲れ果てて，大山ケーブルカー始発駅についた。ケーブルカーはごった返していて，私達は、大勢の客と、押し競饅頭をしなければならなかった。
そうこうしているうちに、ケーブルカーは下社駅で停車した。私達を含めて，乗客が車内から降りる様は，鯨が嘔吐するように見えた。外は霧が立ち込めていて，一丈先でさえも見えなかった。相変わらず雨がザーザー降っていた。私達は登山道入り口まで行ってみたが、雨降り山らしく、雨がひどいのと，霧が濃くて登山道がほとんど見えなくて危険と言う訳で、登山を諦めた。良治伯父さんが大

山阿附利神社で絵馬を買い、「家内安全商売繁盛」と書いて、朝子が宣言通りに書いて、平助が「早く一人前になれますように！」と書いて奉納した。正太と、じいちゃんが「大山阿附利神社神泉拝観所」という所へ行って、「神泉」を一瓶もらってきた。私も飲ませていただいたが，あまりにも冷たくて，頭がツーンとなるほどだった。

父ちゃんは、まだ未練があるらしく，登山道入り口の周りをうろうろしていたが，「ほら直治、これから下るよ！」と良治伯父さんが連れ戻してきた。まるで、しなびた大根のようになっていた。

そして、私達は再びすし詰めのケーブルカーに乗って店の並ぶ坂へ戻ってきた。正太と八重さんは文句ばかり言っていたが，伯父さんがある工芸展に行って「お、独楽。懐かしいな。」と、回し独楽を一つ買った。朝子が同じ店で，竹製の籠を買った。平助は、「実家に送ろう。」と言って，漬物の詰め合わせを一つ買った。じいちゃんが、お守りと御札を買った。これをみて，父ちゃんは再び元気を取り戻し，

「さあ行くぞ，次の目標は旅館ＯＸ。全速全身！」と声をあげ、先頭をきって歩き始めた。

時々良治伯父さんの助けも借りながら，父ちゃんは無事に皆を旅館に連れていった。ところが、それはとても古い建物で，廊下を歩くと床がギイギイ鳴り，廊下と部屋を隔てるものは襖一枚しかなく，さらに窓はガタガタ、という有様。八人いたので、四人四人づつ部屋を割られたから、面積はまだ良いものの，私達は、昼寝をしようと思っても，廊下を通るほかの客の足音が煩くて眠れない，窓からの隙間風がひどい，冷房がうまく効かない、といったことに悩まされた。私は疲れきっていて、一日不運続きだったから、

「まったくもう、父ちゃんの言うことを信用するんじゃなかった。」と思わず言った。正太も、「こんな風になるのなら、うちにいたほうがよかった。」と言った。共感してくれる人がいたので、私は父

ちゃんの悪口を言い合った。すると、
「この馬鹿者が、お前のお父さんだろ、そんなに悪く言うやつがあるかい！」と、良治伯父さんが仰った。私はその意味がわからなくて、ムカッとしてしまった。でも、それを口に出して言うと、伯父さんに怒られるから、しなかった。なので、吐き気がしそうだった。
　すると、父ちゃんががっくりと落ち込んでどこかへ行ってしまった。「ちょっと、どこ行くんだよ！」と、伯父さんはすぐに追いかけた。それがとても意外に見えたので、私はこっそり後を付けていった。
　すぐ近くの酒屋に父ちゃんはいた。既に酒を飲んで酔っ払っていた。
「なにやってるの、こんなところで、戻ろうよ。」と、伯父さんは言った。
「皆俺のせいだ。」と、父ちゃんはふて腐っていた。「皆のこと、楽にしてやろうと思ったのに、かえって駄目にしちまった。合わせる顔がないよ。一生懸命交渉したのにさ、旅行会社と。」
「お前な、一から十まで無理しなくたっていいんだよ。交渉って値切りだろ。銭、そんなに無かったんだろ、なら、もっと早いうちから言ってくれれば良いのに。そうしてくれれば、私も都合の言い日をつけるのに。」
「兄貴、ほっといてくれよ。あわせる顔なんか無いんだから。」
良治伯父さんは、鞄の中から独楽を出して回した。
「それはないよ。存分、楽しませてもらったから。」
やはりさすが兄弟であった。いつもお互い憎まれ口を叩いているが、やはりどこかで繋がっている。子供ながら、微かにそう思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0232a/

増田家回顧録

2010年10月11日00時04分発行